

ヴィリエ・ド・リラダン 『未来のイヴ』と / における超越¹

木 元 豊

はじめに

ヴィリエ・ド・リラダン (Jean-Marie-Mathias-Philippe-Auguste de Villiers de l'Isle-Adam, 1838-89) はしばしば象徴主義と結び付けられる作家である²。象徴主義は、狭義には1886年9月18日付の『フィガロ』紙にジャン・モレアス (Jean Moréas, 1856-1910) が発表した「象徴主義宣言」に端を発する比較的短命に終わった文学運動を指す。一方、広義にはより広汎に19世紀末のフランス文学、とりわけ詩において確認できる思潮を指す。ヴィリエはモレアスら象徴主義の詩人たちが師と仰いだステファヌ・マラルメ (Stéphane Mallarmé, 1842-98) の年長の友人にあたり、世代的に狭義の象徴主義者とみなすことは不可能である。そして本稿で扱う『未来のイヴ』*L'Ève future* に関していえば、この長編小説はモレアスの「象徴主義宣言」が出される数ヶ月前の1886年5月に刊行されており、そこに「宣言」の影響を見ることは時代錯誤的である。したがって、ヴィリエを象徴主義の作家とみなせるとすれば、それはあくまで広義の意味においてである。しかも、ヴィリエが詩よりもむしろ小説や劇といった散文作品を多く発表したのに対して、象徴主義はまずは詩を巡る運動であったので、広義の象徴主義においてもヴィリエは傍流の作家ということになる。

とはいえ、ヴィリエに象徴主義の先駆者を見ることはもちろん誤りではない。

¹ 本稿は、2022年6月11日に京都大学人文科学研究所にて開催された「人文研アカデミー2022：ヴィリエ・ド・リラダンとフランス象徴主義『残酷物語』と『未来のイヴ』が語りかけてくるもの」において筆者が行った発表「『未来のイヴ』と / における超越」の発表内容に、大幅な加筆、修正を施したものである。

² Cf. A. W. Raitt, *Villiers de l'Isle-Adam et le mouvement symboliste*, Corti, 1986.

ベルトラン・マルシャルは、象徴主義的言説には「精神的な特性」と「文学的な特性」があり、この両者が相補的であることを指摘している³。マルシャルによると、象徴主義の「精神的な特性」は、何よりもまず反物質主義であり、理想主義（イデアリスム）である⁴。一方、「文学的な特性」はまずは自由詩の称揚ということにあり、これは結局「形式と思考の照応」という問題に行き着き、この点から第一の特性である理想主義（イデアリスム）に結びつく⁵。この二つの特性の内、ヴィリエにとりわけ関係するのは、最初の「精神的な特性」の方である。マルシャル自身、ヴィリエを象徴主義に関係付けるにあたり、「ヘーゲル哲学に培われ、秘教主義が混入した理想主義、貴族的郷愁、反近代的アイロニー」の三点を挙げている⁶。

『未来のイヴ』もヴィリエの理想主義が非常に色濃く現れた作品である。しかもこの作品に限っては「絶望的な理想主義」とでもいえるようなものとなっている。『未来のイヴ』はごく簡単にまとめると人造人間制作の物語である。人造人間にはハダリー (Hadaly) という名が与えられているが、これはペルシャ語で「理想」を意味すると作中で説明されている⁷。しかし、なぜ「理想」という名の人造人間を作らなくてはならないかといえ、それは現実には理想が存在していないからである。この作品の起点には、理想の不在という現実があり、この現実を超越することが問題となっている。

そして、この理想の探究において、『未来のイヴ』はマルシャルの指摘する象徴主義的な言説の第二の特性と結びつく。象徴主義において「形式と思考の照応」が求められるように、『未来のイヴ』においては「肉体と魂の照応」が求められているのである。人造人間ハダリーにおいて求められている理想こそ、この「肉体と魂の照応」にほかならない。なぜなら、ハダリーのモデルとなる女性におい

³ Bertrand Marchal, *Lire le Symbolisme*, DUNOD, 1993, p. 7.

⁴ *Ibid.*, pp. 7-11.

⁵ *Ibid.*, pp. 11-14.

⁶ *Ibid.*, pp. 10-11.

⁷ Voir Villiers de l'Isle-Adam, *L'Ève future*, édition présentée, établie et annotée par Alan Raitt, Gallimard, « Folio », 1993, p. 144. 以下、本書を E. F. と略す。

て問題なのは、まさに「肉体と魂のちぐはぐさ」であり⁸、ハダリーはこの現実の超越のためにこそ作成されなければならないからである。

『未来のイヴ』は「象徴主義宣言」に先立つ作品であるが、その内容に関しては、このようにきわめて象徴主義的な側面を有する。そして、この象徴主義的な側面は、現実における理想の不在の確認から理想の創造へと向かう超越の運動に存している。本稿の目的は、『未来のイヴ』におけるこの超越の運動を捉えることを通じて、後の象徴主義とも深い結び付きを有するヴィリエの理想主義のあり方を明らかにすることである。

さて、本稿では「超越」という語を「超越性」もしくは「超越的なもの」という静的な意味合いよりも、むしろ「超越する」という行為、運動を指す語として用いる。ヴィリエは『未来のイヴ』の序文で、この作品を「形而上学的芸術作品 (l'œuvre d'Art-métaphysique⁹)」と呼んでいる。「形而上学的な (métaphysique)」という形容詞が『未来のイヴ』を理解する上で重要なことは言うまでもなからう。この言葉は「超越、包摂」を意味する接頭辞 *méta-* と「物質の、物質的な、自然に関する；物理学の、物理 (学) 的な；身体の、肉体的な」といった意味を持つ形容詞 *physique* から成立している。先に述べた通り、『未来のイヴ』は「理想」という名の人造人間を制作する物語であるが、まずは理想的な身体を完璧にコピーすることが前提となっており、それが実現してはじめて、そこにその身体にふさわしい魂を与えることが問題となる。言い換えれば、*physique* なものの存在を条件として、これを超越すると同時に、包摂するもの、すなわち文字通り *méta-physique* なものの創出が問題となっているということである。このことはこの作品のラテン語の銘句「儂きものに依りて、永遠なるものを探せ。(Transitoriis quaere aeterna¹⁰.)」からも読み取れる。物質的なものから精神的なものへ、身体から魂へ、自然から超自然へという超越こそ、『未来のイヴ』を

⁸ Voir *ibid.* pp. 77-78.

⁹ *Ibid.*, p. 37.

¹⁰ *Ibid.*, p. 35.

読み解く鍵なのである。

そして、この超越の運動の原動力となっているものが、夢と嘲りとの対話的關係であると考えられる。『未来のイヴ』には「夢想家に、冷笑家に。(Aux rêveurs, Aux railleurs¹¹.)」という献辞が付けられている。原文では「夢想家に」という語句と「冷笑家に」という語句の間にかかなりのスペースが設けられており、両者の対立的關係を表しているが、読点と句点によって、両者は一文にまとめられており、夢と嘲りとの双方が読者に求められる資質であることが示されている。読者に求められる資質であるということは、作品を読み解く鍵であるということでもある。夢はもちろん「理想」を求める力であり、限界を超越する力となり得る。一方、嘲りは相手の限界を指摘するものである。夢と嘲りとの対話的關係によって、夢は自ら限界を超えてより高次のものとなり得るわけである。

ここまで『未来のイヴ』の決定稿のことを問題にしてきたが、この作品は10年近くの創作期間を経て完成されたものである。そして、残された草稿や異稿からは、最初は嘲りのニュアンスが強かった作品が、段階を踏んで理想主義的なニュアンスを強めていったということが理解できる。すなわち、夢と嘲りとの対話的關係を原動力とする超越の運動は『未来のイヴ』という作品内部の問題に留まらず、作品の生成そのものを支える運動とみなすことができるのである¹²。

さらに、この作品の創作には作者の不幸な恋愛が関係していることが知られている。プレイヤッド版全集に収録された草稿を確認すると¹³、作者がこの作品を

¹¹ *Ibid.*, p. 38.

¹² 『未来のイヴ』の作中で、人造人間ハダリーの作者であるエジソンは、彼の来るべき作品のことを何度か『未来のイヴ』と呼んでいる。『未来のイヴ』は人造人間ハダリーの生成の物語であるが、作品のこの自己言及を踏まえれば、それは『未来のイヴ』の生成の物語であるともいえる。実際『未来のイヴ』という小説はその生成過程の各段階を内包する形で、削除よりもむしろ追加によって構成されており、『未来のイヴ』における人造人間の生成の物語は、小説自体の生成過程と興味深い重なりを見せる。作品内部の生成は作品自体の生成の延長線上に捉えることが可能なのである。

¹³ 『未来のイヴ』に関しては、かなり多くの草稿の断片が残されており、プレイヤッド版全集に編者によって解説されたものが収録されている。Voir Villiers de l'Isle-Adam, *Œuvres complètes*, édition établie par Alan Raitt et Pierre-Georges Castex avec la collaboration de Jean-Marie Bellefroid, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1986, tome I, pp. 1464-1550. なお、本全集は以下 O. C. と略す。

書くことによって、自らの不幸な経験を超克しようとしていた形跡がある。作品の執筆自体が作者の内的対話の延長線上で行われていた可能性があるのである。

最後に、この作品の決定稿が「夢想家に、冷笑家に。」という献辞を有しているということは、読者もまた作品の夢と嘲りとの対話的關係を原動力とする超越の運動に参加するように誘われているということになる。

このように、本稿で問題とする「超越」は、単に『未来のイヴ』という作品内部の運動に留まらず、作品の生成過程や作者、さらには読者といった作品の外部も巻き込む形で成立している。本稿のタイトルを「『未来のイヴ』における超越」ではなく、「『未来のイヴ』と／における超越」としたのはこの外部を合わせて問題にするためである。

本稿では『未来のイヴ』という作品の内部のみならず、作者の生涯における出来事や作品の生成過程も問題にするゆえに、第1章では、まず作者ヴィリエ・ド・リラダンの生涯を概観し、その後『未来のイヴ』のあらすじを確認する。第2章では、作品の生成過程を「超越」の観点から考察し、ここで作者の不幸な恋愛と作品との関係にも言及する。第3章では、『未来のイヴ』自体を「超越」の観点から考察するとともに、『未来のイヴ』とその先行バージョンである『新たなイヴ』との違い、とりわけ結末の違いを問題にする。

1. ヴィリエ・ド・リラダンの生涯と『未来のイヴ』のあらすじ

『未来のイヴ』とその生成過程の考察に入る前に、ヴィリエ・ド・リラダンがどのような生涯を送り、どのような人物だったのかを確認し、『未来のイヴ』のあらすじを見ておきたい。まずはヴィリエの生涯を概観する。特にヴィリエの文学的傾向、『未来のイヴ』の生成にとって重要な作者の恋愛問題、これと関わりの深い家族の問題に留意したい。

1-1. ヴィリエ・ド・リラダンの生涯¹⁴

未来の作家、ジャン＝マリー＝マティアス＝フィリップ＝オーギュスト・ド・ヴィリエ・ド・リラダンは1838年11月7日に、ブルターニュ地方のサン＝ブリューの貴族の家に、伯爵として生まれた。彼には兄弟姉妹がなく、ヴィリエ・ド・リラダン家の一人息子として家族の期待を一身に背負うことになる。彼も彼の家族も、ヴィリエ・ド・リラダン家が中世の十字軍の時代に遡る大変由緒ある家柄であることを信じており、このことが彼の生涯と文学のあり方を、良くも悪くも規定した。彼の作品には貴族＝詩人・芸術家とブルジョワ＝俗物との二項対立がしばしば見られる。これはもちろん1830年代以降の文学的トポスではあるが、ヴィリエの場合はここに彼の人生自体が充当されることになる。現在は、中世の著名なヴィリエ・ド・リラダン家と作家の家との間には繋がりがなかっただろうと考えられているが、作家自身も彼の家族もこの繋がりを疑うことはなかった¹⁵。

ヴィリエの家族には父母のほか、ケリヌー叔母さんという母方の大叔母で、母の養母である人物がいた。ヴィリエ家の家計はこの女性の年金によって支えられていた。作家の父はかなり奇矯な、多分に山師的な人物だったようで、一攫千金を目論んで、例えば革命期の亡命貴族の埋蔵金を探すといった事業を起こしては失敗し、財産を蕩尽していた。一方、母の方は優しくはあるが、大変影の薄い人物だったようである。このような家族であったから、一人息子である未来の作家にはヴィリエ家再興の大きな期待が掛けられ、ケリヌー叔母さんは彼の作家デビューのために惜しみなく資金援助をしていたようだ。とはいえ、家族が期待した文学的成功はまずは経済的なものであったため、作家の文学的理想は次第に家族の期待に背くものとなっていく。

作家は1855年から家族とともにパリに滞在するようになる。1860年頃から普法戦争勃発までの約10年間に彼はボードレル、フローベール、ルコント・ド・リール、テオフィル・ゴーチエといった先達を知り、生涯の友人となるマラルメ

¹⁴ 本節に関しては、特に以下を参照。O. C., tome I, pp. XLI-LII ; Alan Raitt, *Villiers de l'Isle-Adam, exorciste du réel*, Corti, 1987.

¹⁵ Voir *ibid.*, pp. 11-12.

をはじめ、高踏派周辺の詩人たちと親しくなる。彼は詩集でデビューしたが、演劇による成功を求めて、『エレン』 *Elën* (65年)、『モルガース』 *Morgane* (66年)、『反抗』 *La Révolte* (70年初演)の三戯曲を発表する。しかし、上演に至ったのは最後の『反抗』だけで、期待した成功は得られなかった。また、ヘーゲル哲学や神秘主義思想を知った彼は、その影響下に『イシス』 *Isis* (62年)、「クレール・ルノワール」*« Claire Lenoir »* (67年)、「予兆」*« L'Intersigne »* (67-68年)といった小説を世に問う。「クレール・ルノワール」は彼が初めてエドガー・アラン・ポーを意識して執筆した幻想小説であるという意味でも、彼が初めてブルジョワと実証主義者を風刺した作品であるという意味でも、彼が喜劇的才能を開花させた作品であるという意味でも、きわめて重要な作品である。しかし、結局、彼の作品はどれも、仲間内以外にはほとんど評判にならなかった。彼はまたワーグナーの音楽に熱狂し、1869年には友人たちとともにスイスまでワーグナーに会いに行き、1870年には同じ友人たちとドイツのワイマールで開催されたワーグナー・フェスティヴァルにまで赴いている。このように、当時のヴィリエの文学的・芸術的嗜好は既に20年後の象徴派詩人たちの傾向に合致するものであった。

この最初の10年間の文学活動を経済的に支えていたのは、主にケリヌー叔母さんの財産であった。しかし、この財産も作家と作家の父親のせいで尽きていったようで、1868年頃から作家が経済的に困窮し始めたことがわかっている¹⁶。いづれにせよ、この最初の10年間に作家が文学活動を継続するためには、ケリヌー叔母さんを初めとする家族の後ろ盾が必要だったため、作家は公然と家族に背くこともできなかったと思われる。

家族は彼の女性関係には大変厳しく対処したようだ。ヴィリエは1862年から64年まである高級娼婦と断続的に交際していた¹⁷。それを知った家族はこの交際を断ち切るべく、62年の夏に3週間ほど、63年の夏に2週間ほど、作家をブルターニュのソレーム大修道院に閉じ込めている。後にヴィリエは学問のために自ら修

¹⁶ Voir *ibid.*, pp. 87-88.

¹⁷ Voir *ibid.*, pp. 49-56.

道院に籠ったかのように吹聴しているが、事實は家族による幽閉だった。また、1866年末から67年初頭にかけて、おそらくヴィリエを大きく傷つけたと思われる事件が発生する。66年の末にヴィリエはテオフィル・ゴーチエの次女のエステルと、ゴーチエの了承を得て婚約するのだが、彼自身の家族の反対で、婚約破棄せざるを得なくなったのだ¹⁸。ゴーチエは当時最も尊敬されていた詩人であり、その娘との結婚は作家にとっては大変な名誉だったはずだが、彼の家族にとってはヴィリエ・ド・リラダン家には相応しくない格違いの結婚でしかなかったわけである。もしかするとこの時から、ヴィリエにとって、結婚とはまずは家柄の問題となったのかもしれない。

1871年にケリヌー叔母さんが亡くなるとヴィリエ家はいよいよ経済的に行き詰まる¹⁹。70年代にはヴィリエは相変わらず劇における「成功」を求めていたようで、旧作を劇場に持ち込んだり、旧作を改稿したり、新作をものしたりしていたが²⁰、いずれも金銭的な「成功」には結びつかない。その一方で、生活費を工面するためだと考えられるが、後に『残酷物語』に収められることになる短編小説を執筆して、雑誌発表するようになる。しかし、ヴィリエは遅筆であり、あまり多くの収入は得られなかったようだ。

こうした経済的困窮を解決するための手段として、当時画策されたのが大金持ちの女性との結婚だった²¹。作家にとっての売りはヴィリエ・ド・リラダンの名前と貴族の称号だったのである。『未来のイヴ』のアリシア・クラリーのモデルとなるアンナ・エール・パウエルと73年の末に出会ったのも、結婚仲介者の斡旋によるもので、当初は財産目当てだった。とはいえ、ヴィリエはこの女性に本当に恋してしまい、そして捨てられてしまう。この失恋の顛末は『未来のイヴ』

¹⁸ Voir *ibid.*, pp. 72-75.

¹⁹ Voir *ibid.*, pp.131-132.

²⁰ 1874年頃から『モルガース』を『王位要求者』*Le Prétendant*に改稿している。また、1872年には生涯の作品となる『アクセル』*Axel*に着手している。1875年にはアメリカ独立百周年を記念する演劇コンクールに応募するために『新世界』*Le Nouveau Monde*を執筆している。

²¹ Voir Alan Raitt, *op. cit.*, pp.144-150.

にとって重要なので、後に詳しく見ることにする。なお、ヴィリエが『未来のイヴ』の元となる作品に取り組みはじめたのは1878年と考えられている²²。『未来のイヴ』の先行バージョンである『新たなイヴ』*L'Ève nouvelle*が雑誌連載されるのは1880年から81年にかけてである。

1881年にはヴィリエの身の回りの世話をしてくれていたマリー・ダンティースという文盲の未亡人との間にヴィクトールという息子が生まれる²³。ヴィリエはこの息子をトールと呼んで大変に可愛がり、どこにでも連れて歩いたようだ。この時期からマリーと彼女の連れ子のアルベール、そしてトールの四人での暮らしが始まり、これが生涯続くことになる。ただし、作家はマリーと結婚することは拒み続け、トールにヴィリエの名前を残すためにというマラルメとユイスマンスの説得に応じて、マリーと結婚したのは亡くなる数日前のことだった²⁴。この件はヴィリエの貴族的の偏見ゆえと理解されることが多いが、彼がマリーに宛てた数少ない手紙（彼女は文盲なので、アルベールに代読するように依頼している）からは²⁵、実に細やかな愛情が読み取れ、ヴィリエにとって愛情と結婚は別次元の問題であったようにも感じられる。

1883年には短編集『残酷物語』*Contes cruels*が刊行され、ヴィリエの文名がようやく高まりはじめる。84年にはユイスマンスが『さかしま』*À rebours*を発表し、ヴィリエの作品を高く評価する²⁶。そうしたことがあって、やがてヴィリエとユイスマンスとレオン・プロワの三者による交友が始まる。ヴィリエが晩年にカトリック的な傾向を強めるのには、プロワの影響があったといわれている。

1885年には『未来のイヴ』が雑誌連載され、翌86年には単行本刊行される。さらに同年に短編集『至上の愛』*L'Amour suprême*も出版される。87年には「ク

²² Voir *O. C.*, tome I, pp. 1459-1464.

²³ Voir Alan Raitt, *op. cit.*, pp.214-215.

²⁴ Voir *ibid.*, pp. 361-369.

²⁵ Voir Villiers de l'Isle-Adam, *Correspondance générale*, édition recueillie, classée et présentée par Joseph Bollery, Mercure de France, 1962, tome II, pp. 217-222. なお、以下、本書を *C. G.* と略す。

²⁶ Voir Alan Raitt, *op. cit.*, p. 270, pp. 279-280 et p. 301.

レール・ルノワール」を含む短編集『トリビュラ・ボノメ』*Tribulat Bonhomet*、88年には短編集『突飛な物語』*Histoires insolites*と『新残酷物語』*Nouveaux Contes cruels*が刊行されるという具合に、陸続とヴィリエの作品が世に出る。88年初頭にはベルギーへの講演旅行も行う。80年代後半になって、ようやくヴィリエの時代が来たのである。

しかし、既に病に犯されていたヴィリエは89年8月18日に、パリの病院で50歳で亡くなる。亡くなる前に刊行の準備を終えていた時評集『過ぎゆく人々のもとで』*Chez les passants*と死の間際まで作者が改稿し続けた戯曲『アクセル』は死後出版となった。

こうしてヴィリエの生涯を概観すると、この作家が常にアンビヴァレンツを抱えていたことが見てとれる。家族は彼にとってメセナであると同時に敵対者であり、家名は誇りであると同時に重荷であり、ブルジョワ的なものを憎みながら、ブルジョワ的にならざるを得ず、生きるためには文学も家名も商品として売らねばならず、聖なる結婚を夢見ながら、財産目当ての結婚を画策せざるを得ず、生涯の伴侶は彼の家柄と仕事に最も不釣り合いな、下層階級の文盲の女性であった。この近代に迷い込んでしまった中世の伯爵は、アントワーン・コンパニオンが「アンチモダン」と名付けたタイプの人物、すなわち「心ならずもモダンであった近代人、もしくは引き裂かれた近代人、さらには時宜を得ない近代人²⁷⁾」なのである。

このアンビヴァレンツは彼の作品のいたるところに現れている。『未来のイヴ』も例外ではない。この小説の主人公は小説が発表された当時第一線で活躍していた発明家のトーマス・エジソンをモデルにしており、エジソンその人として作品に登場するが、しかし作者自身が作品の序文で断っている通り、『未来のイヴ』の主人公は何よりもまず「メンロ・パークの魔術師 (le « sorcier de Menlo Park²⁸⁾」)、すなわち「アンチモダン」なのである。

²⁷⁾ アントワーン・コンパニオン『アンチモダン 反近代の精神史』、松澤和宏監訳、鎌田隆行・宮川朗子・永田道弘・宮代康文訳、名古屋大学出版会、2012年、1ページ。

²⁸⁾ E. F., p. 37.

1-2. 『未来のイヴ』のあらすじ

では、『未来のイヴ』のあらすじを見ておこう。

この作品は全6巻74章で構成されている。整理のために、巻のタイトルを挙げながら、あらすじを確認する。

第1巻「メンロ・パーク」。ある夕刻、メンロ・パークの研究所でエジソンが、自分の蓄音機の発明が遅過ぎて、もはや録音するに足る言葉がすべて失われてしまっていることを嘆いている。そこに、彼の恩人である若いイギリス人貴族、エワルド卿が訪ねてくる。エワルド卿は不幸な恋に苦しんでいる。彼にはアリシア・クラリーという女優で歌手の恋人がいるが、この女性は貴族的な美貌の持ち主でありながら、卑俗な魂しか持ち合わせていない。エワルド卿の悩みは、恋人の魂を嫌悪しつつ、恋人の肉体的な美しさに囚われていることである。そのため、彼は恋人と別れて自殺しようとしてまで思い詰めている。「誰かあの身体から魂を取り去ってくれないかな」というエワルド卿が思わず口にした悪魔的な願いに、エジソンは自分がその願いを叶えることを約束する。

第2巻「契約」。エジソンはエワルド卿の夢を叶えるために、アリシアの生き写しだが、彼女のような魂を持たない人造人間の製造を約束する。エジソンはエワルド卿を説得するために、中世の甲冑のような姿の人造人間ハダリーを呼び出してみせる。エジソンはハダリーをアリシアそっくりの姿に変貌させ、蓄音機によって言葉を与える予定である。彼によれば、ハダリーとはペルシャ語で「理想」を意味する。エワルド卿は半信半疑ながら、人造人間を試してみることにする。

第3巻「地下のエデン」。ハダリーの仕組みを説明するために、エジソンはエワルド卿をメンロ・パークの地下奥深くにある、ハダリーの住まいに連れて行く。古代の墳墓を改造したそこは、太陽のように電球が輝き、人工の花が咲き乱れ、人工の鳥が飛び交う楽園である。

第4巻「秘密」。エワルド卿の求めに応じて、エジソンは人造人間を作ろうと考えた動機を明かす。エジソンにはエドワード・アンダーソンという幼なじみがいた。まじめな男で、事業に成功し、妻子にも恵まれていたが、踊り子イヴリン・ハバルに誘惑され、破滅した。エジソンによれば、イヴリン・ハバルは実は醜い

女性で、あらゆる人工物を用いて自分を魅力的に見せていたのであった。アンダーソンは人工物の犠牲になったのである。エジソンはハバルのような女性から男性を救うために、このような女性を人造人間で置き換えることを思いついた。彼によれば、どちらも人工物でしかないがゆえに、交換可能なのである。なお、この登場人物の姓ハバルはヘブライ語で「虚無」を意味する。

第5巻「ハダリー」。ハダリーの仕組みを説明するため、エジソンはハダリーの甲冑のような身体を開けて、エワルド卿に内部機構を見せる。ここでハダリーが機械にほかならないことがエワルド卿に明確になる。ハダリーの肺は蓄音機でできており、ハダリーの言葉はそこに記録されることになっている。また、ハダリーの行動は肺の上部のシリンダーに記録され、それは蓄音機と連動して作動するようにできている。甲冑のような身体の上には、まず人工の肉が加えられ、それが人工の皮膚で覆われることになる。最終的にハダリーはアリシアに瓜二つの身体を持つことになる予定である。ハダリーの解剖を終えたエジソンとエワルド卿は地上に戻ってくる。

第6巻「……こうして、影があった」。アリシア・クラリーがメンロ・パークに到着する。エジソンは策を労して、アリシアの姿を秘密裡に奪い取る。21日後の約束の日、エワルド卿にハダリーから報告が届く。メンロ・パークに赴いたエワルド卿は、アリシアと二人で庭を散歩することになる。いつもと様子の違うアリシアに心を打たれ、彼の内に彼女に対する愛が再燃する。しかし、彼がアリシアだと思ったのは、アリシアそっくりになった人造人間ハダリーであった。心を弄ばれたエワルド卿は猛烈な怒りを感じる。一方、ハダリーは自分を受け入れるように彼に迫る。エワルド卿は抵抗を試みるが、最終的に屈服する。二人はエジソンの待つ部屋に戻ってくる。エワルド卿の故郷イギリスへの輸送のため、ハダリーは専用の棺に収まるが、その直前にハダリーは庭で話したことは秘密にするようにとエワルド卿にささやく。一方、エジソンは人造人間の最後の秘密、すなわちソワナについて、エワルド卿に説明する。ソワナは、イヴリン・ハバルのせいで夫を失い、嗜眠状態に陥ったアンダーソン夫人の内に、エジソンの暗示によって呼び覚まされた未知の魂であり、その特殊な状態でハダリーを操ってい

たという。エジソンは、庭でのハダリーの言葉はすべてあらかじめ録音されたものであったと主張するが、エワルド卿にはそうは思えない。彼はハダリーの内部にこの世ならぬものが宿っていたと感じる。しかし、エワルド卿はエジソンに反論することなく、秘密を保ったまま、ハダリーを納めた棺とともに旅立つ。その後、エジソンはアンダーソン夫人が亡くなっており、ソワナがいなくなっていることを確認する。三週間程後、エジソンは新聞でエワルド卿が乗った船が火災で難破したことを知る。エワルド卿は助かったが、ハダリーは消滅し、アリシアも同じ火災で亡くなった。新聞記事を読み終えたエジソンのもとに、エワルド卿からハダリーの喪にのみ服すという電報が届く。小説はエジソンの沈黙で幕を閉じる。

さて、第2巻のタイトル「契約 (Le Pacte)」は「悪魔との契約」を想起させる言葉である。また、第4巻のタイトルにあるようにエデンの園は地下の墓の中にある。第6巻のタイトル「……こうして、影があった」は、創世記の冒頭の「光あれと神は言われた。こうして、光があった」のパロディーとなっている。このように『未来のイヴ』という作品は非常に悪魔的な色付けがなされている。転倒した創世記、光の創世記ならぬ、影の創世記なのである。そしてこの転倒の中で、人造人間が理想化されているのである。とはいえ、それでもなお人造人間が理想化されていることは間違いない。しかし、『未来のイヴ』の最初期の段階ではそうではなかった。人造人間の制作は嘲りの対象でしかなかったのである。『未来のイヴ』の生成過程は、人造人間の段階的な理想化の過程となっている。

2. 『未来のイヴ』の生成過程と超越²⁹

後に『未来のイヴ』となる作品は1878年の春頃から書き始められたと考えられている。きっかけは実在のトーマス・エジソンによる蓄音器の発明であった。

²⁹ 『未来のイヴ』の生成過程に関しては、特に以下を参照。O. C., tome I, pp. 1429-1645 ; E. F., pp. 360-390 ; Jacques Noiray, *Le Romancier et la machine. L'Image de la machine dans le roman français (1850-1900)*, Corti, 1982, tome II « Jules verne - Villiers de l'Isle-Adam », pp.277-299 ; *id.*, *L'Ève future ou le laboratoire de l'Idéal*, BELIN, 1999, pp. 25-28.

エジソンは1877年の末に蓄音器（フォノグラフ）を発明する。エジソンの名は電話やアエロフォンと呼ばれる拡声器に結び付けられて、1877年頃からフランスでも知られ始めていたが、1878年の春に蓄音器がフランスに紹介されるとまたたく間に有名になったようだ。当時パリでは5月1日から11月10日まで万国博覧会が開かれていたが、そこには蓄音器を含むエジソンの発明品も展示されていた。ヴィリエが万博に訪れた可能性もある。

1878年の春に遡るこの最初の段階の物語に関しては、研究者が「そっくりさん（Le Sosie）」もしくは「マダムとそのそっくりさん（Madame et son sosie）」と呼んでいる断片的な草稿が残されている³⁰。この「そっくりさん」から1886年5月の『未来のイヴ』の刊行に至るまでの約8年間に、この作品は何度かの大きな改稿を経て発展してきた。この過程は以下のように大きく四つの段階に分けることができる³¹。

① 1878年春のものとは推定される題名のない、短く欠落の多い草稿群。研究者によって「そっくりさん」あるいは「マダムとそっくりさん」と呼ばれている。風刺的短編小説。

② 『エジソンの逆説的人造人間』*L'Andréide-Paradoxale d'Edison*。1878年後半に書かれた考えられている未完の中編小説。作品のプランと多くの草稿が発見されている。内容的に決定稿に近付いているが、エドワード・アンダーソンの挿話（決定稿第4巻）および地下墓所でのハダリーとエワルド卿の会話の場面（決定稿第3巻）などが存在しない。

③ 『新たなイヴ』*L'Ève nouvelle*。1879年から1880年かけて書かれた未完の長編小説。1880年9月4日から18日まで第1部のみ『ゴーロワ』紙*Le Gaulois*に掲載。1880年12月13日から1881年2月14日まで『フランスの星』紙*L'Étoile*

³⁰ プレイヤッド版全集（1986）とNoiray（1982, 1999）においては「Le Sosie」が用いられ、フォリオ版の『未来のイヴ』（1993）では、編者によって「Madame et son sosie」が提案されている。

³¹ この四段階の区分に関しては、とりわけ以下を参照。Noiray（1999）, p. 25.

française に、結末のみを残し、ほぼ完全に掲載。内容、構成ともに決定稿に非常に近いが、ソワナが登場しない。ただし、将来のソワナの導入を予期させるような謎めいた言葉がエジソンの発話に存在する。

④ 『未来のイヴ』 *L'Ève future*。『新たなイヴ』を修正、加筆した長編小説。ソワナが導入され、それに伴って多くの箇所が修正され、新たな挿話が増えられる。1885年7月18日から1886年3月27日まで『現代生活』紙 *La Vie moderne* に掲載される。これに更に細部の修正を加えたものが、1886年に単行本刊行された決定稿である。

この四段階の間に位置付けられるような過渡的な草稿も残されているが、本稿では主にこの四段階の差異に注目して考察する。

2-1. 「そっくりさん」(「マダムとそっくりさん」)³²

男性の叶わぬ恋を癒すために、エジソンがその男性が恋している女性と瓜二つの女性型の人造人間を製造をするという物語であること、また、人造人間には蓄音器が搭載される予定であること、この二点はすでに決定稿と共通している。

しかし、未来のエワルド卿にあたる人物はジョン・ブル男爵 (le baron John Bull) という名前で、男爵とは言っても、成り上がり者であることが名前から見取れる人物であることが異なる。また、この男爵はエジソンの恩人などではなく、エジソンの顧客に過ぎない。エジソンの方も男爵に負けず劣らず粗野な人物で、1分当たり100ドルの支払いを要求している。さらに人造人間のモデルとなる人物は「マダム」と呼ばれているだけで、個性もなく、抽象的な次元に留まっている。エジソンは現実の女性に対する人造人間の優位性を説くが、それは人造人間には下心がないという理由からである。しかし、ここには『未来のイヴ』に見られる激烈な女性批判もない。

残されている断片は全てエジソンとジョン・ブル男爵との対話で構成されてい

³² 「そっくりさん」と呼ばれる草稿群に関しては、以下を参照。O. C., tome I, pp. 1464-1469.

るが、ほとんどがエジソンの台詞である。エジソンの台詞にはアイロニカルなトーンが顕著で、この物語が当初、『残酷物語』に収められている「天空広告」
 « L’Affichage céleste » や「末期の吐息の化学分析器」
 « L’Appareil pour l’analyse chimique du dernier soupir » といった、「装置の物語 (contes à appareils)」と呼ばれる一連の風刺小説と同様のものとして構想されていたことが推測できる³³。この時点では風刺の対象は人造人間によって恋の代償を得ようとする行為であり、それで金儲けをしようとする科学技術者であったのである。

2-2. 『エジソンの逆説的人造人間』³⁴

「そっくりさん」に見られる構想は1878年の後半には大きく変更されて、『エジソンの逆説的人造人間』という中編小説に至る。まず大きく変化するのは登場人物の性格づけである。エジソンは「そっくりさん」の場合とは異なり内面的深みを備えた人物となっている。未来のエワルド卿に当たる人物はリヨネル卿 (Lord Lyonnel) という名になり、高貴な人物に変貌している。彼の恋人は、決定稿のアリシア・クラリーと同様、絶世の美女でありながら、魂が卑俗であるという特性が付与され、イヴリン・ハバルの名が与えられている。そして、それまで名前がなかった人造人間はハダリーと名付けられている。イヴリン・ハバルの名は後に別の登場人物に与えられることになるが、この時点では未来のアリシア・クラリーに相当する人物に与えられていたのである。先にハダリーが「理想」を意味し、「ハバル」が虚無を意味することを見たが、人造人間にハダリーの名が与えられ、そのモデルとなる女性にハバルの名が与えられたということは、すでにこの時点で現実の女性に対して、人造人間が理想化されたことを意味する。実

³³ 「装置の物語」に関しては、とりわけ以下を参照。Noiray (1982), pp. 243-276. なお、「装置の物語」に数えられる「栄光製造機」
 « La Machine à Gloire » と「トリスタン先生の療法」
 « Le Traitement du docteur Tristan » には、エジソンの人造人間に関する言及がある。この二作品の初出はそれぞれ1874年と1877年であるが、問題の箇所は1883年刊行の短編集『残酷物語』に収録されたテキストで初めて追加されており、この時点で『未来のイヴ』の先行バージョンである『新たなイヴ』はすでに発表されていた (O. C., tome I, p. 593, p. 730, p. 1363 et p. 1410)。

³⁴ この段階の草稿群に関しては、以下を参照。Ibid., pp.1480-1515.

際、「そっくりさん」には存在しなかった女性批判、女性嫌悪の言説が、『エジソンの逆説的人造人間』には溢れかえっている。女性こそ諸悪の根源であると言わんばかりの勢いなのである。

この急激な攻撃対象の変化は、ほぼ間違いなく、先に触れたアンナ・エール・パウエルという女性に対する作者の不幸な恋に起因していると考えられる。先に見たように、1871年にケリヌー叔母さんが亡くなってから、ヴィリエ家は経済的に困窮しており、この打開策として、ヴィリエと大金持ちの女性との結婚が画策されていた。1873年の末に、結婚仲介人からそうした大金持ちの女性としてアンナ・エールを紹介されたヴィリエは、仲介人とともにロンドンまでこの女性に会いに行き、恋に落ちてしまう。1874年1月5日にはロンドンからマラルメに宛てて、以下のように書き送っている。

親愛なるマラルメ、ずいぶん遅くなったが、僕は人生で初めての恋をしている。比較不可能なものを比較できるだろうか？僕はこの世に実際二人とはいない天使を愛している。ねえ君、これが最後の恋だよ。この後は、ヤコブのはしごを外されたって構わない！僕は僕にとって愛することが唯一可能な女性を愛しているんだ。彼女の財産、それはとってもいいものだし、とても好都合だし、素晴らしいけれども、もうそんなことじゃ全くないんだ。

*Cher Mallarmé, j'aime bien tard et c'est la première fois de ma vie que j'aime. Puis-je comparer ce qui est incomparable ? J'aime un Ange comme il n'y en a positivement pas deux sous le soleil ! C'est le dernier, mon cher, après celui-là, on pourra tirer l'échelle de Jacob ! J'aime ma seule femme possible. Ses millions, c'est fort bien, c'est très heureux et splendide, mais ce n'est plus ça du tout*³⁵.

ところが、ヴィリエはこの女性と結婚するために、大奔走しなければならないこ

³⁵ C. G., tome I, p. 184. 訳は筆者。

とになる。プレイヤッド版の编者によると、このアンナ・エールはアイルランドの出身で、ロンドンで一人で生活しているようであったが、実はスタッフォードシャーのニューカッスル＝アンダー＝ライムに住む男性の保護下であって、彼女と結婚するためにヴィリエはこの男性と交渉して、法的に彼女の自由を手に入れる必要があったらしい³⁶。そのため、ヴィリエはニューカッスルとロンドンの間を行ったり来たりし、ロンドンでは大使館や領事館に出向いたりして、法的手続きを進めたようだ。しかし、ニューカッスルからロンドンに戻ってきてみると彼女は姿を消していたのである。プレイヤッド版の编者は先に引用したマラルメ宛の手紙をヴィリエが書いているときには全ては終わっていたのではないかと推測している。というのも、ヴィリエ自身がこの手紙の中で彼女が不在であることを示唆しているからだ。こうして、ヴィリエは初めての恋を踏みにじられたのである。

ところが、この女性がどうも再びヴィリエの前に現れることになったらしい。プレイヤッド版の编者によると、この女性はパリのノートル＝ダム＝デ＝ザールという施設で幼少期から音楽教育を受けており、イタリアで歌手の道を歩み始め、1876年12月28日にパリのイタリア座でヴェルディの『イル・トロヴァトーレ』のレオノーラの役を演じたいのである³⁷。当時の劇評から、彼女にはオペラ歌手としての才能はあまりなかったらしいということがわかっている。イタリア座で歌えたのも、強い後ろ盾があったからのようだ。ヴィリエが1876年にアンナ・エールのイタリア座での公演を見たかどうかはわからないが、少なくとも公演のことを知っていた可能性は高い。ヴィリエは大のオペラ好きであり、『イル・トロヴァトーレ』に関しては若い頃に劇評も書いている。結局、彼女は歌手の道を断念したようで、今度は1880年に『母親ジャーナル』*Journal des mères* というパリ発行の週刊誌の編集長に収まったようである。

プレイヤッド版の编者は、『未来のイヴ』において、アリシア・クラリーがア

³⁶ Voir *O. C.*, tome I, pp. 1433-1435.

³⁷ Voir *ibid.*, pp. 1437-1439.

イルランドの出身であること、エワード卿がアリシアに出会うのがスタッフオードシャーのニューカッスル＝アンダー＝ライムであること、アリシアがデビューしたばかりの女優兼歌手であることなどを挙げて、アリシアのモデルがアンナ・エールであると結論づけている³⁸。そして、登場人物の名前は決定稿とは異なるものの、これらの設定自体はすでに『エジソンの逆説的人造人間』に現れている。つまり、アンナ・エールとの不幸な恋愛のトラウマがエジソンの人造人間の物語を大きく変貌させることになったのである。

では、作者は自ら失恋の鬱憤を晴らすために、『エジソンの逆説的人造人間』において、女性を激しく攻撃し始めたのだろうか。そういう面がなかったとは言いつても、事情はもう少し複雑であるようだ。プレイヤッド版編者によると、作者は作品のこの段階で複数の献辞案を作成しており、どれも作者自身が線を書いて取り消しているらしいのだが、プレイヤッド版編者によって解説された献辞案の一つに以下のものがある。

ある乙女に

私が知らない、一度も会ったことのないあなたに！

私以外を愛することなく亡くなるだろうあなたに、というのも、おまえは私のものなのだから、おまえによって奪われ、汚された私の全人生を込めた、この絶望の叫びを捧げよう。

À

une jeune fille

À vous que je ne connais pas et que je n'ai jamais vue !

À vous qui mourrez sans avoir rien aimé que moi, puisque tu es mienne, je dédie ce cri désespéré, où je mets toute ma vie volée et profanée par toi³⁹.

³⁸ Voir *ibid.*, pp. 1439-1441.

³⁹ *Ibid.*, p.1483. 訳は筆者。

プレイヤッド版編者はこの献辞案の「あなた」と「おまえ」が異なる存在に向けられていると理解しているようだが⁴⁰、ここは同じ存在を指しているのではないだろうか。「あなた」はもちろん「私」の理想の女性であるが、その同じ女性が「私」の人生を台無しにしてしまったということなのではないか。「私」は「あなた」に会ったことがない。ということは、「あなた」は「私」が夢見ただけの存在だったということだろう。だからこそ「おまえは私のもの」なのであろう。結局、「私」は自分が夢見た理想の女性によって裏切られたのだと解釈できる。なぜなら、そのような女性は存在しなかったからである。

この献辞案に作者のアンナ・エールとの不幸な恋が結びついていることは明らかではないだろうか。作者が理想の女性と思った女性は、現実にはそのような女性ではなかったわけである。したがって、現実の女性が作者を裏切ったわけではない。理想の女性は初めからそこにいなかったのだから。これは作者のアンナ・エールに対する最大限の侮蔑だろう。と同時に、作者はこの侮蔑がアンナ・エールにとっては痛くも痒くもないものであることを理解していただろう。作者の怒りは作者自身の夢にしか向けようがなく、作者は『エジソンの逆説的人造人間』において自身の夢を徹底的に踏みにじり、そうすることで苦しみから逃れようとしていた可能性がある。

このことは、やはり作者によって削除されたもう一つの献辞案からも理解できる。こちらの方は、先の献辞案よりも個人的でないものになっている。

わが高名なる同時代人に

本書は毒をもってしか治療できそうにない類の病人に向けて書かれている。他の者に向けてではない。

(中略)

本書が下剤をかけ、焼き焦がさなければならぬような者にとっては、本

⁴⁰ Voir *ibid.*

ヴィリエ・ド・リラダン『未来のイヴ』と / における超越 木元 豊

書は苦くて、健康に良い印象を与えるが、他の者にとっては致命的なものとなりかねない。

À

mes illustres contemporains

Ce livre est écrit pour cette sorte de malades qu'on ne saurait traiter que par le poison. Non pour d'autres.

[...]

S'il laisse une impression amère et salubre à ceux qu'il doit purger et brûler, il pourrait être meurtrier pour d'autres⁴¹.

ここで注目したいのは、「毒をもってしか治療できそうにない類の病人」とされるのが『未来のイヴ』においてはエワルド卿であり、この毒に相当するものが人造人間ハダリーであることだ。『エジソンの逆説的人造人間』の時点では、作者は作品自体を「恋愛を治療するための毒」とみなしていたことがこの献辞案から理解できる。そして、この毒を最も必要としていたのは作者自身だったのだろう。

このように、元々はかなり単純な図式の風刺小説だった作品は、ここに至って、「夢」と「嘲り」がほとんど倒錯的に入り混じった大変複雑な小説に変貌したのである。実は「そっくりさん」が書かれる以前の1877年9月頃に作成されたと考えられている、『残酷物語』に収録するための作品の手書きのリストに「ミス・ハダリー・H」というタイトルが残されており、プレイヤード版編者はこれは「ミス・ハダリー・ハバル (Miss Hadaly Habal)」だったのだろうと推測している⁴²。ハダリーが理想を、ハバルが虚無を表すとすれば、このミス・ハダリー・ハバルは先の献辞案に描かれている女性に合致する。すなわち、不在によって「私」を苛んだ理想の女性である。おそらく「ミス・ハダリー・ハバル」は、人造人間の物語以前に、これとは別に構想されていたものであり、「そっくりさん」執筆

⁴¹ *Ibid.* 訳は筆者。

⁴² Voir *ibid.*, pp.1470-1471.

後に二つの物語が合体して『エジソンの逆説的人造人間』になった可能性が高いと考えられる。

しかし、そもそも「そっくりさん」においては、恋愛の対象を人造人間によって代替しようとする男性登場人物の方に批判の矛先が向いていた。ところが、『エジソンの逆説的人造人間』においては、批判の矛先は恋愛対象の女性の方に向けられ、現実の女性にはハバル、すなわち「虚無」の名が、人造人間にはハダリー、すなわち「理想」の名が与えられており、「そっくりさん」のベクトルが一見全く逆転してしまっているように思われる。

しかしながら、実は、『エジソンの逆説的人造人間』にも「そっくりさん」と同様のベクトルも存在している。『エジソンの逆説的人造人間』においても、リヨネル卿はエジソンにとって初対面の顧客に過ぎない。また、人造人間の作成を提案するのはリヨネル卿の方からで、エジソンは大金と引き換えにこれを引き受けている。しかもエジソンが作成する人造人間は純粋に客体である。人造人間の魂のことをしきりと気にかけるリヨネル卿に対して、エジソンは人造人間には魂がないことを言明する。リヨネル卿が魂を入れ替えて欲しいとは頼んだが、取り除けとは頼んでいないと不平をこぼすと、エジソンはオリジナルに魂がないのだから、コピーにも入れるべきでないと返す。リヨネル卿が人造人間との会話を試してみたいと言うと、エジソンは人造人間がリヨネル卿の恋人の姿を纏うまでは話せないと答える。なぜなら、人造人間の言葉はあらかじめ録音されていなくてはならないからである。しまいには、エジソン自身が人造人間は結局低俗な肉体的な欲望を満足させるものに過ぎないと、これを否定してしまう。このように、『エジソンの逆説的人造人間』においては、魂を持たぬ純粋な客体でしかない人造人間は、「理想」という名が与えられながらも、それとは正反対なものになってしまう可能性が示唆されている。だからといって、現実の女性を称揚することはすでに不可能になっている。なぜなら、この「理想」は「現実」のコピーでしかないからだ。この人造人間の両義性が『エジソンの逆説的人造人間』が完成させられなかった理由ではないだろうか。

2-3. 『エジソンの逆説的人造人間』から『新たなイヴ』へ

これまで考察した「そっくりさん」や『エジソンの逆説的人造人間』とは異なり、『新たなイヴ』は雑誌に連載された作品である。この作品は1880年9月4日から18日までまずは第1巻のみ『ゴーロワ』紙に掲載された。その後、かなりの手直しを経て、1880年12月13日から1881年2月14日まで『フランスの星』紙に、結末のみを残して、ほぼ完全に掲載されている。

『新たなイヴ』では、それまでのリヨネル卿の名はエワールド卿に、恋人の名はイヴリン・ハバルからアリシア・クラリーに変更された。そして、エジソンの幼なじみのエドワード・アンダーソンのエピソードが付け加えられ、アンダーソンを誘惑し、破滅させる女性にイヴリン・ハバルの名が与えられた。人造人間の名はハダリーのままである。こうして、登場人物の布陣は、名前も含めて、決定稿である『未来のイヴ』とほぼ同一になった。ただ、『新たなイヴ』にはソワナが登場しない。また、結末は書かれはしたものの、発表されなかった。発表されなかったのは、おそらく作者がこの結末に満足できなかったからだと考えられている。ソワナの問題と結末の問題は『未来のイヴ』を考察してから検討することにして、ここでは『エジソンの逆説的人造人間』からの変更点の意味を考えたい。

『エジソンの逆説的人造人間』に関しては、プラン以外には残っていない箇所が多いので、一体どの程度まで『新たなイヴ』と異なるのかは正確にはわからないが、最も目立つ変更は、エドワード・アンダーソンとイヴリン・ハバルのエピソードが付け加えられたことである。この変更の意味を考えてみたい。

『新たなイヴ』以降はこのエピソードはエジソンが人造人間作成するに至った動機を説明するものとして使われている。アンダーソンの死をきっかけにイヴリン・ハバルに関して調査したエジソンは、この女性が醜い容姿ながら、人工物を身に纏って、アンダーソンを誘惑したことを突き止める。そして、もし人工物が喚起する幻想が誘惑の手段であるならば、このような女性は完全な人工物である人造人間によって置き換えることが可能であろうと論じる。つまり、人造人間はイヴリン・ハバルのコピーとして考案されたわけだ。ただし、エジソンは人造人間とイヴリン・ハバルに明確な差異を設ける。人造人間には男性の欲望を喚

起するのではなく、消す力があるというのである。『新たなイヴ』では以下のように述べられている。「人造人間の特性はモデルの女性によってかき立てられたあらゆる情熱を破壊することにあるのです。(le propre d'une Andréïde [est] de détruire toute passion excitées par son modèle⁴³.)」エジソンはこのような抑止力がどこから生じるのか明確にしていなかった。ただ、人造人間にはこのような力があると宣言することによって、人造人間をイヴリン・ハバルと対立させ、そのような女性よりも優れたものと見せることが可能になる。

『エジソンの逆説的人造人間』では人造人間は肉体的欲望を満足させるに過ぎないものと、エジソン自身によって批判されていた。アンダーソンのエピソードの追加によって、『新たなイヴ』以降はこうした批判をかわせるようになったのである。

また、『エジソンの逆説的人造人間』では人造人間はリヨネル卿の注文によって作成されるが、『新たなイヴ』以降はエジソン自身が恩人の命を救うために無償提供するという形に変更されている。こうして人造人間は男性の直接的な欲望から遠ざけられる形になっているのである。

さらに、人造人間を主体化する傾向が現れてきている。『エジソンの逆説的人造人間』においては、エジソン自身が人造人間には魂がないことを言明していたが、『新たなイヴ』以降は人造人間にモデルとは別種の魂を吹き込むとエジソンが述べるようになる。また、『エジソンの逆説的人造人間』では人造人間が女性の姿を纏うまでは話すことができないとされていたが、『新たなイヴ』以降は人造人間がアリシアの姿を纏う以前から話したり、動いたりするようになる。『新たなイヴ』ではどうしてこのようなことが可能なのか謎のまま残される。一方、『未来のイヴ』では、ソワナを物語に導入したことによって、人造人間はソワナによって操られていたのだという合理的な説明が可能となっている。このように『新たなイヴ』以降は人造人間を主体化する傾向が見られるのであるが、『新たなイヴ』

⁴³ *Ibid.*, p.1615. 訳は筆者。『新たなイヴ』のテキストはプレイヤッド版全集に収録された異校をもとにしている。

ではこれが不十分なままに留まっており、これを完成させるために必要だったのがソワナであるということになる。

おそらくこの主体化の傾向と、アンダーソンのエピソードによって導入された、人造人間の欲望を抑止する力とは無関係ではないのだろう。なぜなら、どちらも人造人間の側に能動的な力を認めるものだからである。とすれば、こちらもまた、ソワナの導入を待たなければ合理的に説明しにくいものかもしれない。

このように、『新たなイヴ』は『エジソンの逆説的人造人間』の限界を乗り越えつつあるが、まだ不十分な、過渡的な状態にあったと見るのが可能だろう。これが未完に終わったのも、そうした過渡的な状態と無関係ではないと思われるが、この点に関しては『未来のイヴ』の分析を済ませた後に改めて考えていきたい。

3. 『未来のイヴ』における超越、そして『新たなイヴ』との差異

『未来のイヴ』の生成過程からは最初は純粋な客体として構想された人造人間が次第に主体化されていく動きがあることが明確となった。つまり、元々身体でしかなかったものに、魂を付与することが問題になってきたということである。当然、『未来のイヴ』においては、人造人間にいかにして魂を付与するのが最大の問題となる。この問題が中心に据えられているからこそ、最初に見たようにこの作品は「形而上学的芸術作品 (l'œuvre d'Art-métaphysique)」と呼ばれているのだと言っても過言ではないだろう。『未来のイヴ』において、人造人間に魂を付与するために重要な役割を担っているのは、以下の三者である。①人造人間に言葉を与える蓄音器、②エワルド卿、③ソワナ。これらを「超越」の観点から順に考察していく。この順に考察するのは、物語で問題になるものこの順番であるからだ。『未来のイヴ』は段階を踏んで、次第に深く掘り下げられていく物語であるため、なるべく冒頭から結末に向けて理解していくのが良いのである。

3-1. 蓄音器と超越的なもの

あらすじで見たように、『未来のイヴ』の冒頭にはかなり長いエジソンのモノ

ログが置かれている。エジソンは、自分の蓄音機の発明が遅過ぎて、もはや録音するに足る言葉がすべて失われてしまっていることを嘆いているのだが、では「録音するに足る言葉」とは一体どういう言葉なのだろうか。実はエジソンにとって最も重要なのは、次の引用が示すように、神の御言葉なのである。

とはいえ、御言葉は福音を印刷することだけはお許しになったが、録音することはお許しにならなかったからな。しかし、「聖なる書を読みたまえ！」と言う代わりに、「聖なる響きを聞きたまえ！」と言うこともできたかもしれないのにな。—もう、手遅れだ。

Toujour est-il qu'il [= le Verbe divin] a permis seulement qu'on *imprimât* son Évangile, et non qu'on le *phonographiât*. Cependant, au lieu de dire : " Lisez les Saintes Écritures ! " on eût dit : " Écoutez les Vibrations Sacrées ! " — Enfin, il est trop tard ⁴⁴...

ここでエジソンが「御言葉」と呼んでいるのは、神のことであり、キリストのことである。『ヨハネによる福音書』第1章には、以下のように記されている。

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらず成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった ⁴⁵。

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた ⁴⁶。

⁴⁴ E. F., p. 50. 訳は筆者。

⁴⁵ 『聖書 旧約聖書統編つき』、新共同訳、日本聖書教会、1987、1988、1995年、(新) 82ページ。

⁴⁶ 同上。

つまり、エジソンが録音できなかったと嘆いているのは、万物の根源であり、命そのものであるような、そうした超越的な言葉なのである。

しかし、エジソンの考えは次第に変化していく。ヨシユアの角笛の音がエリコの壁を崩したという『聖書』の記述を引き合いに出して、彼は音と聞き手の相関性ということの問題にする。そして、ヨシユアの角笛の音を聞くことができたのはエリコの壁だけだったと結論づける。ヨシユアの角笛の音をたとえ録音できたとしても、そこに備わっていた超越的な力はエリコの壁以外は聴取できないため、それ以外の者は通常の角笛と何ら変わることはない音しか聞けないということになるのである。この相関性の理論に基づいて、エジソンは「沈黙ができたのは我々の内部においてなのだ」と述べる。つまり、たとえ、超越的な言葉や物音を録音することができたとしても、聞き手が「超越的なもの」を聞き取る能力を失ってしまったのだから無意味であるということだ。したがって、嘆く理由もなくなる。

こうしたエジソンの思考の裏側には、人造人間に魂を与えるための重要なヒントが隠されている。すなわち、「超越的なもの」を聞き取る能力のある聞き手ならば、録音された言葉のうちに「超越的なもの」を回復できるかもしれないということである。

しかし、この点に深入りする前に、蓄音器と「超越的なもの」に関するもう一つ別の問題を見ておきたい。『未来のイヴ』の第3巻4章「神」のエピソードを問題にしたい。エワルド卿とエジソンはハダリーの住まいである地下の人工楽園を訪れている。ここには何羽もの機械仕掛けの鳥がいるのだが、そうした鳥たちは人間の言葉でおしゃべりをしたり、笑ったりしている。実は機械仕掛けの鳥たちには小型の蓄音器が搭載されていて、エジソンはそこに彼を訪問してきた客のおしゃべりや笑い声を録音していたのである。そのようなグロテスクな鳥たちに囲まれているところで、エワルド卿はナイチンゲールの歌声を耳にする。人造人間にこの声は美しいですねと言われたエワルド卿は、その通りだと答えて、「これは神の作品だ。([C]est l'œuvre de Dieu⁴⁷.)」と述べる。すると、人造人間から、

⁴⁷ E. F., p.170. 訳は筆者。

ならばこの声がどのように生み出されているかを知ろうとしない方が良い、さもないと神がこの歌から消えてしまうと警告を受ける。しかし、エジソンはエワルド卿に、このナイチンゲールの声が録音であること、声の主は2ヶ月前に死んでしまっていること、しかも声を再生している蓄音器は25里離れた場所にあることを伝えてしまう。すると、人造人間がエワルド卿に小声で「ほら言った通りでしょう!... 歌声から神様が消えてしまいました。(『Voilà ce que c'est!... Dieu s'est retiré du chant』⁴⁸.)」と告げる。

このエピソードから、蓄音器は「超越的なもの」を録音し得ないことがわかる。ヴィリエは蓄音器が空気の振動を書き取り、書き取ったものを再び空気の振動に変換する装置であることを正確に理解していた。蓄音器が捉え得るものは、純粋に物理的なもの、physiqueなもののみであって、それを超えるもの、métaphysiqueなものはそこには存在しないのである。したがって、エジソンは冒頭モノローグで、嘆く意味さえないことを嘆いていたことになる。「超越的なもの」は何もそこには残されないからだ。

しかし、このエピソードにも裏の理解が可能である。エワルド卿が録音されたナイチンゲールの歌声に神の存在を感じることができるのであれば、録音されたものには本来備わっていない「超越的なもの」をそこに付与できるということでもある。少なくともエジソンのコンセプトでは、人造人間の言葉はすべて蓄音器によって録音されたものになる予定である。その言葉には「超越的なもの」、すなわち魂も心も命も存在しない。しかし、聞き手であるエワルド卿がそこに魂や心や命を感じれば、そういうものがあるのと同じことにならないか。エジソンのコンセプトでは人造人間が魂を得るかどうかは、エワルド卿次第なのである。

3-2. エワルド卿

先に考察したナイチンゲールのエピソードでは、ナイチンゲールの声がどのようにして生じているのかをエワルド卿が知らない限り、少なくともエワルド卿に

⁴⁸ *Ibid.*, p.172. 訳は筆者。

とってはそこに「超越的なもの」が保持されたはずである。とすれば、人造人間に関しても、その仕組みが明かされない方が、そこに魂を感じやすいはずだ。ところが、エジソンはエワルド卿に人造人間の内部構造まで見せて、人造人間の仕組みを洗いざらい説明しようとする。これはどうしてなのだろうか。

エジソンがエワルド卿に人造人間を提供するのは、エワルド卿の命を救うためである。エジソンによれば、エワルド卿は毒をもって治療しなくてはならない病人であり、その薬であり、毒でもあるものが人造人間であるわけだ。もちろんエワルド卿の病気とは恋愛である。人造人間は恋愛治療薬なのである。しかし、これが毒であるということは、人造人間には危険性があるということである。エジソンはこの危険性を何度か強調している。それどころか、エワルド卿の性格を前にして計画を進めるべきか躊躇い、エワルド卿からエジソンがもし自分の立場だったらどうするかを問い詰められると、人造人間ではなく、死を選ぶとまで言う。それほどまでに恐ろしい危険とは何なのか、エジソンはなかなか明確にしないが、エワルド卿が人造人間を試してみる覚悟を決めた後に、人造人間の危険性を「精神錯乱と神 (la démence et Dieu⁴⁹)」という言葉で要約する。

「神」の方は、キリスト教においては命の創造は神の領分なので、人造人間を作成すること、とりわけそれに魂を与えることが瀆聖的な行為であることは明確である。したがって、神が存在するなら、罰を受ける危険がある。

では、人造人間が引き起こし得る「精神錯乱」とはどのようなものが考えられるだろうか。最も普通に考えられることは、そこに存在しないものを存在すると錯覚してしまうことではないだろうか。人造人間は生きてるように見えるが、生きていない。魂があるように見えるが、そこに魂は存在しない。なぜなら、エジソンによれば、人造人間の発する言葉は録音だからである。人造人間に命があり、魂があると信じてしまうならば、それは精神錯乱にほかならない。エジソンの考えでは、エワルド卿は人造人間に魂を与える役割を担っている一方で、人造人間に魂があると信じてはならないのである。つまり、彼は人造人間に魂がある

⁴⁹ *Ibid.*, p.146. 訳は筆者。

と信じると同時に信じないという、非常に難しいゲームを生きなくてはならないのである。エジソンの構想では人造人間は指輪と首輪で操作しなければ動かない。人造人間には操作マニュアルも付属している。人造人間が活着していると完全に信じてしまえば、操作など不能になってしまう。エジソンがエワルド卿に求めているのは、精神錯乱すれすれのところで踏みとどまる理性なのである。

この点から、なぜ人造人間が恋愛治療薬なのかも理解できる。エジソンはエワルド卿に彼の恋愛がナルシシクな幻影の虜になっているだけであることを強調している。エワルド卿がアリシア・クラリーのうちに見ている存在はそこにはいない存在であると、しかし、彼は自分でもそのことを知りながら、心の目を塞いでいるのだというのである。しかも、エジソンによれば、全ての恋愛はこうした幻影にほかならない。

しかし、言葉でいくら説明されても、エワルド卿は自分の恋が幻影にほかならないことを理解できていない。そして、これを理解させることこそ、アリシアそっくりになった人造人間に課された第一の役割だと考えられる。エジソンはアリシアそっくりになった人造人間を、そうとは明かさずにエワルド卿に対面させる。エワルド卿はそれが人造人間だと見抜けず、アリシアにとうとう自分の心が通じたのだと思い、アリシアへの恋心を再燃させ、同時に人造人間のことを思い出し、これを嘲る。すると、アリシアだと彼が信じていた存在が自分が人造人間であることを明かすのである。この時、エワルド卿は地獄から罵られたように感じ、エジソンに対する猛烈な殺意を抱く。

エジソンがこのような手のこんだプレゼンテーションを仕組むのも、エワルド卿がまずは幻影を現実と混同することを期待しているからであり、ついで彼が現実と信じたものが幻影にほかならないことを知らしめるためだろう。自分の恋愛の対象が幻影にほかならないこと、それが実在しないことを彼に認めさせることによって、恋愛を理性的に反省させること、これこそがエジソンがもくろむ恋愛の治療だと考えられる。なぜなら、エジソンにとっては、恋愛とは幻影を現実と取り違える精神錯乱に過ぎないからである。この意味で、この時点での人造人間は恋愛を成就させることによって、恋愛を破壊する機械なのである。そして、人

造人間はこの異化作用によって、イヴリン・ハバルのように幻影を利用する女性とは差異化されるのである。エジソンはイヴリン・ハバルのような女性から男性を守るために人造人間を作ったのであるから、人造人間は当然幻影を破壊する力、いわば「露出的な虚無の力」すなわち「死の力」を備えているのである。

人造人間の危険性の一端は、この破壊的な力に認められるだろう。エワルド卿が逆上するのは、彼の魂が致命的な傷を受けたからである。しかし、彼は彼に傷を与えた何者かを嘲笑うことによって、どうにかこの傷を克服する。

彼の心は追い詰められ、辱められ、打ちのめされていた。

彼は天と地とを一瞥の下に収めると、彼の魂に加えられた不当な辱めを〈未知の相手〉に送り返す、漠とした、乾いた、侮辱的な笑い声を上げた。そうすることで、彼は全き自分を取り戻した。

Son cœur était confondu, humilié, foudroyé.

Il embrassa, d'un coup d'œil, le ciel et la terre, avec un rire vague, sec, outrageant, qui renvoyait à l'Inconnu l'injure imméritée que l'on avait faite à son âme. Et ceci le remit en pleine possession de lui-même⁵⁰.

エワルド卿はかろうじて自分を取り戻したが、人造人間の破壊力によって、完全に自分を見失う危険、すなわち精神錯乱の危険もあったのである。

しかし、人造人間の危険性はこの破壊的な力ではなからう。人造人間の力はむしろ幻影とその誘惑にあるのだから。自分を取り戻したエワルド卿は今度は人造人間ハダリーの誘惑的な力と戦わなくてはならなくなる。彼は彼の理想の姿に変貌したハダリーに魅せられながらも、最後の抵抗を試みる。この時に抵抗の武器となるのが、やはり嘲りである。エワルド卿は、「いつから神様が機械に話すことをお許しになったのだ？ (Depuis quand Dieu permet-il aux machines de

⁵⁰ *Ibid.*, p. 308. 訳は筆者。

prendre la parole⁵¹?)」と人造人間に対して侮蔑的に振る舞う。人造人間は「理想」の姿はしていても、所詮は「機械」に過ぎないのだとの認識を保つこと、このことによってのみ、エワルド卿は人造人間に対抗して理性を保つことができるのである。最終的にエワルド卿はハダリーの魅力に屈服する。しかし、ハダリーが機械に過ぎない、純粋な客体に過ぎないという認識が保てている間はエワルド卿は理性を保つことができる。そして、この点こそが『未来のイヴ』におけるソワナの導入によって、争点となるのである。

3-3. ソワナ

あらずじで確認したように、ソワナは、イヴリン・ハバルのせいで夫を失い、嗜眠状態に陥ったアンダーソン夫人の内に、エジソンの暗示によって呼び覚まされた未知の魂であり、その特殊な状態でハダリーを操っていたのだということが、エワルド卿がハダリーを受け入れ、ハダリーが輸送用の棺に収まった後に、エジソンによって、エワルド卿に説明される。

既に指摘した通り、ソワナは『未来のイヴ』の先行バージョンの『新たなイヴ』には登場しない。『新たなイヴ』では、アリシアの姿を纏う以前の人造人間がどうして歩いたり、話したりできるのかという点が謎のまま残されていた。『未来のイヴ』ではソワナが遠隔操作していたからだという合理的な説明が可能になっている。エジソンはソワナの求めに応じて一種の鍵盤を作成し、これと人造人間とを微細な導線で繋いで、ソワナがハダリーをリモートコントロールできるようにしているのである。この鍵盤に関しては、人造人間の動力の構造は自動オルガンがモデルとなっているので、ヴィリエはオルガンの鍵盤をイメージしていた可能性が高い。また、アリシアの声ではない人造人間の声はソワナによって発せられていたとされている。

このソワナが付け加えられたことが『未来のイヴ』と『新たなイヴ』の最も大きな相違であり、このソワナの導入によって、作品の意味が根本的に変わったと

⁵¹ *Ibid.*, p. 319. 訳は筆者。

考えられている。というのも、ソワナは、それまでは多かれ少なかれ客体に留まっていた人造人間に付け加わった「魂」とみなされ得るからである。たしかにその通りなのだが、ただし、この魂のハダリーへの加わり方に関してエジソンとエワルド卿とがまったく異なる理解をしていることに注意しなければならない⁵²。

エジソンはハダリーに未知の魂が加わったということを認めているのだが、ハダリーに加わったとは言っていない。ハダリーのものとなったアリシアの「声に、身振りに、抑揚に、微笑みに、肌の青白さにさえ (à la voix, au geste, aux intonations, au sourire, à la pâleur même⁵³)」付け加わったと述べているのである。この意味を理解しなくてはならない。エジソンによると、アリシアの姿と声を人造人間に写し取るにあたって、ソワナはアリシアに暗示を掛け、アリシアのその影響下に演技したという。しかも、演技も発声もソワナによって最上のものが選択され、これが人造人間に記録されている。結局のところ、アリシアは自ら演技したのではなく、ソワナに身体を貸し与えただけなのである。したがって、人造人間に記録されたアリシアの声も動作もアリシア自身の表現ではなくて、ソワナの表現なのである。その意味において、エジソンはハダリーに魂が付け加わったと述べていると理解できる。だからこそ、彼は、エワルド卿がハダリーを伴って立ち去った後も、ソワナがアンダーソン夫人の内に存在していると考えて、ソワナに話し掛けるのである。結局、エジソンはソワナがそこにはいないことを確認することになる。

一方、エワルド卿はアリシアそっくりになったハダリーが彼に庭で話したが、アリシアの声で話されたにもかかわらず、あらかじめ全てを予測して録音されていたとは到底信じがたいと考える。そこで、それが不可能であることをエジソンに訴えようとするが、ハダリーが輸送用の棺に納まる直前に、庭で話したことをエジソンには内証にするようにと彼に頼んだことを思い出し、秘密を守る。

⁵² この点に関しては、以下の拙論で詳しく論じている。Yutaka Kimoto, « Le rôle de Sowana dans l'histoire de *L'Ève future* de Villiers de l'Isle-Adam », *Études de langue et littérature françaises*, Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises, n°87, 2006.

⁵³ *E. F.*, p. 343. 訳は筆者。

そして、まさにその時に「世界外の存在が人造人間の内にいたことを非常に明瞭に見て取った (il venait d'entrevoir très distinctement la présence d'un être d'outre-monde dans l'Andréide⁵⁴)」のである。すなわち、この時に初めて、エワルド卿は人造人間に機械以上のものを見出したということだ。この時に初めて、彼は後付けで人造人間を主体化したのである。したがって、通常の意味で人造人間が魂を宿したと考えているのはエワルド卿一人であり、それが真実であることは証明ができないのである。

このように、エジソンは最後まで人造人間のことを機械であり、純粋な客体であると考えているが、エワルド卿は最終的にこれを主体化してしまうのである。したがって、エジソンの思惑は最後に阻害されたことになる。エジソンの観点からすれば、エワルド卿は幻影に囚われてしまった可能性があるのだ。

そして、エワルド卿がエジソンの思惑を越え出ることを可能にしたのが、『未来のイヴ』におけるソワナの導入なのである。たしかに、ソワナがいなくてもエワルド卿がハダリーに主体を、魂を見出すことは不可能ではない。しかし、それを裏付ける存在がなければ、読者はそれを妄想とみなすことしかできない。ソワナがいるからこそ、読者はエジソンの意見と同等か、もしくはそれ以上の信憑性をエワルド卿の意見に見出すことが可能になるのである。

3-4. 結末の問題：『新たなイヴ』との差異

では最後に、なぜ『未来のイヴ』ではこのような改変が行われたのかを、『新たなイヴ』に用意されていた結末と『未来のイヴ』の結末とを比較しながら考えてみたい。

先に指摘したように、『新たなイヴ』は結末が発表されないままに未完に終わった。『新たなイヴ』の雑誌に発表された箇所は、エワルド卿がハダリーとともにエジソンのところに戻ってきて、ハダリーを受け入れることをエジソンに告げ、現実のアリシアの存在を忘れていたというところまでであった。先ほどソワナにつ

⁵⁴ *Ibid.*, p. 341. 訳は筆者。

いて考察した際に問題した点は、全て『未来のイヴ』で追加された箇所にある。しかし、実は『新たなイヴ』にも結末が用意されていたことがわかっている⁵⁵。非常にシンプルな結末で、エワルド卿が棺に入ったハダリーとともにメンロ・パークを去っていくところで終わっており、一般的にはハッピー・エンドと考えられている。しかし、これは本当にハッピー・エンドなのだろうか。『新たなイヴ』においてはソワナが登場しないため、人造人間は最終的に機械でしかない。すなわち純粋な客体でしかないということである。エジソンの理論では、人造人間はエワルド卿によって理性的コントロールされねばならない。エワルド卿はそこには主体が存在しないと知りながら、あたかもそこに主体があるかのように振る舞うというゲームを続けなくてはならないことになる。これは遊戯であって、恋愛とは言えないだろう。エジソンにとっては人造人間は恋愛の治療薬なので、これは当然の結果である。したがって、客体でしかないハダリーを無事連れ帰るという結末は、結局のところ、エジソンの勝利、すなわち理性と科学の勝利と幻影と恋愛の敗北しか意味しない。おそらくはその点で作者が満足できなかったために『新たなイヴ』の結末は発表されなかったのではないかと推測できる。

一方、『未来のイヴ』の結末は、船の火災によって、アリシアのみならずハダリーも失われるという悲劇的な結末になっている。この結末の時点では、エジソンにとってはハダリーは機械に過ぎないが、エワルド卿にとってはそうではない。エワルド卿はハダリーが主体であると考えている。しかし、このどちらが正しいのかという答えは物語の中にはない。どちらも同様に可能なのである。もしエワルド卿が無事ハダリーを連れ帰ったとしたら、真実が明らかになるだろう。しかし、ハダリーを連れ帰れないことで、読者に夢が最大限に残されることになる。さらに、エワルド卿が生き残り、ハダリーの喪にのみ服すことで、『未来のイヴ』においては幻影と愛の力が強調されることになる。『新たなイヴ』に用意された結末は冷笑の勝利だった。『未来のイヴ』の結末は冷笑に対する夢の勝利とまでは言えないかもしれないが、その優位性を示すものになっているのである。

⁵⁵ Voir *O.C.*, tome I, p. 1455 et p. 1541.

おわりに

ここまで『未来のイヴ』を超越という観点から考察してきた。生成過程を通じて、人造人間を純粋な客体から主体化していく動きが認められ、それが人造人間の理想化と深く関係していた。また、この過程には作者の不幸な恋愛の経験が充当され、作品の執筆自体が作者にとっては自らの不幸を乗り越えるための手段となっていることも窺えた。さらに、人造人間の主体化、理想化の動きの原動力には、夢と嘲りとの対話的關係が存在した。この対話的關係によって、作品はより複雑に、より高次なものになっていった。とはいえ、この対話的關係を弁証法的關係と捉えるべきではないかもしれない。むしろ、ミハイル・バフチンがドストエフスキーの作品に見出したような対話的關係を想起する方が適切かもしれない⁵⁶。こう考えた時に、『未来のイヴ』が「夢想家」と「冷笑家」に捧げられている意味も見えてくる。人造人間を巡るエワルド卿の理解とエジソンの理解はどちらが正しいという結論が出されぬままに読者に委ねられ、今度は対話を継続することが求められていると言えるだろう。

風刺的才能を存分に持ち合わせた作家であるから当然なのだが、ヴィリエは読者に与える効果というものについて非常に敏感だった。1867年から68年にかけてヴィリエが編集長を務めた雑誌『文学芸術誌』*Revue des lettres et des arts*の銘は「考えさせる (Faire penser)」なのだが⁵⁷、これはヴィリエ文学全体のあり方に当てはまるものである。ヴィリエの文学は読者に大きな役割を割り当てるのである。

このことは『未来のイヴ』においても同様である。エジソンの理論では人造人間の受容者であるエワルド卿に根本的な役割が与えられていた。また、演技指導者、演出家としてのソワナの役割に関してもこうした側面が見て取れる。人造人間に登録されたテキストは高名な詩人や哲学者によって書かれたことになっているが、人造人間に魂を与えるのはテキスト以上にその解釈者であるソワナである。

⁵⁶ ミハイル・バフチン『ドストエフスキーの創作の問題』、桑野隆訳、平凡社、平凡社ライブラリー、2013年；同、『ドストエフスキーの詩学』、望月哲男・鈴木淳一訳、筑摩書房、ちくま学芸文庫、1995年参照。

⁵⁷ Voir O. C., tome II, p.1135.

ソワナはエウルド卿以前にアリシアの演技の受容者にして、解釈者であり、ソワナによって解釈されたものをエウルド卿が受容し、解釈する形になっているわけで、いかに受容者に大きな役割が与えられているかがよくわかる。ということは、『未来のイヴ』の中には読者の役割の大きさが既に書き込まれているということでもある。『未来のイヴ』においては、語り手の言葉も登場人物の発言もほめかちに満ちている。なかでもエジソンはしばしば言い淀んだり、はぐらかしたりする。読者は発言の背後を探らなければ、読解することができない。ハダリーのプレゼンテーションにあたっては、エウルド卿とともに、読者をも欺いている。『未来のイヴ』は読者を対話に巻き込むように仕組まれているのである。

『未来のイヴ』というタイトルは実は『新たなイヴ』よりも前に考案されていた⁵⁸。なぜヴィリエが最初の雑誌連載の際に『新たなイヴ』に変更したのか正確なところはわからないが、この両者の根本的な差異は「現在」に関わるものである。イヴはもちろん『創世記』の原初の女性エバで、元々はヘブライ語で「命」を意味する。『新たなイヴ』というタイトルはこのイヴが現在に復活したことを意味している。しかし、このイヴは機械に過ぎないわけで、フィクティブな命しかないゆえに、非常にアイロニカルな意図を感じさせるタイトルである。一方、『未来のイヴ』はイヴの未来における復活を指し示すと同時に、現在における不在も示している。『未来のイヴ』の結末における人造人間の消滅はタイトルに既に書き込まれているとも言えるのであるが、それがどのように復活するのか、どのような命を得るかは読者に委ねられているとも言えるのである。この意味で、『未来のイヴ』の生成を支えている超越の運動は、終わりなきものとみなせるだろう。

『未来のイヴ』はおそらくヴィリエ・ド・リラダンの理想主義を最も強く反映した作品であろう。しかし、この作品が同時に深い絶望と懐疑とに裏打ちされていることを忘れてはなるまい。『未来のイヴ』の献辞で示された夢と嘲りとの対話的關係こそ、ヴィリエ・ド・リラダンの理想主義、ひいては彼の文学全体のあり方を示すものなのである。

⁵⁸ Voir *ibid.*, tome I, p. 1543.

